

**\* 1960年代の計算機の入力媒体：紙テープ、IBMカードをアーカイブ**

筆者が国立天文台の前身である東京天文台に就職したのは1961年である。今から49年前になる。この観測所は天文学研究の中核機関である天下に聞こえた東京大学の東京天文台の観測所であった。この記事は、国立天文台で使われた計算機の変遷の歴史の1ページとして書いている。

その頃、やっと地方大学にも電子計算機が導入され始めていた。岡山大学の電子計算機導入の理由づけに東京大学の岡山天体物理観測所もデータ解析などに使用するというのが使われた。岡山大学に導入された電子計算機はNEAC2203という機械であった。筆者は高校を出たばかりであったが東京大学の天文台に就職できたことは誇りであったし、その天文台の観測所が地元の国立大学に電子計算機を導入する手助けになったこともうれしかった。そして、東京大学の地元の天文台の貢献は、岡山天体物理観測所が岡山大学の初めての電子計算機を1週間の内、4時間も使わせてもらえたのである。この計算機使用のため岡山大学に通ったのは主に筆者で、その他に西村史朗氏(後の国立天文台データ解析センター長)、市村氏がいた。他の人がこの岡山大学の計算機でどの位仕事をしたかよくは知らないが、筆者は東京天文台報に4編の報告を書いた。筆者が1966年に三鷹の東京天文台に転勤した後、岡山大学の電子計算機は岡山天体物理観測所としてはほとんど使われなかったと記憶している。三鷹には1966年、人工衛星国内計算施設という組織が出来て、OKITAC5090という電子計算機が導入された。その頃の電子計算機の入力媒体が紙テープ(写真1)であった。



写真1 1960年代の計算機の入力媒体の紙テープ

今の研究者は、計算機の媒体としての紙テープなどの存在すら知らないであろう。この紙テープには鑽孔器で穴をあけ、それを光電管で読み取るようになっていたから穴を見れ

ば読み取ることが出来た。現在のHDなどどう眺めてもそのデータを読み取ることにはできないが、肉眼でも紙テープ上に打ち込まれたデータが読めたのである（写真2）。

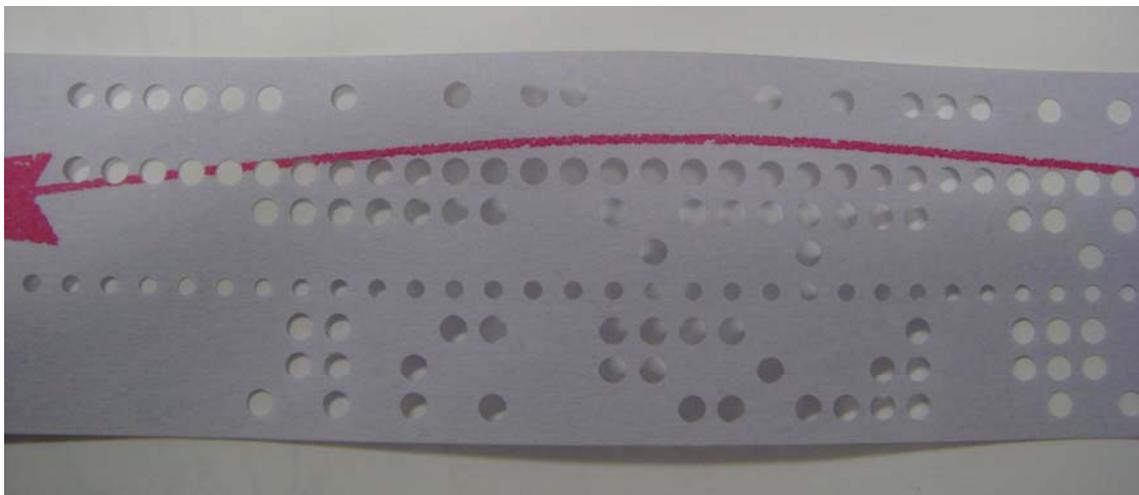


写真2 紙テープ上に鑽孔器であけられた穴

この3月で定年退職するM氏がまとめて大量の紙テープを捨てようとしていたので、国立天文台における計算機の歴史の証明者でもある紙テープをアーカイブの対象として譲り受けた。同時に、その後紙テープにとって代わった紙のカード(IBMカードと呼ばれた)も捨てようとしている一部をもらい受けた。このカードはプログラム用(写真3の上段)とデータ用(写真3の下段)の2種類があった。他に8インチフロッピーディスク、5インチフロッピーディスクもいただいたが、それらについては稿を改める。

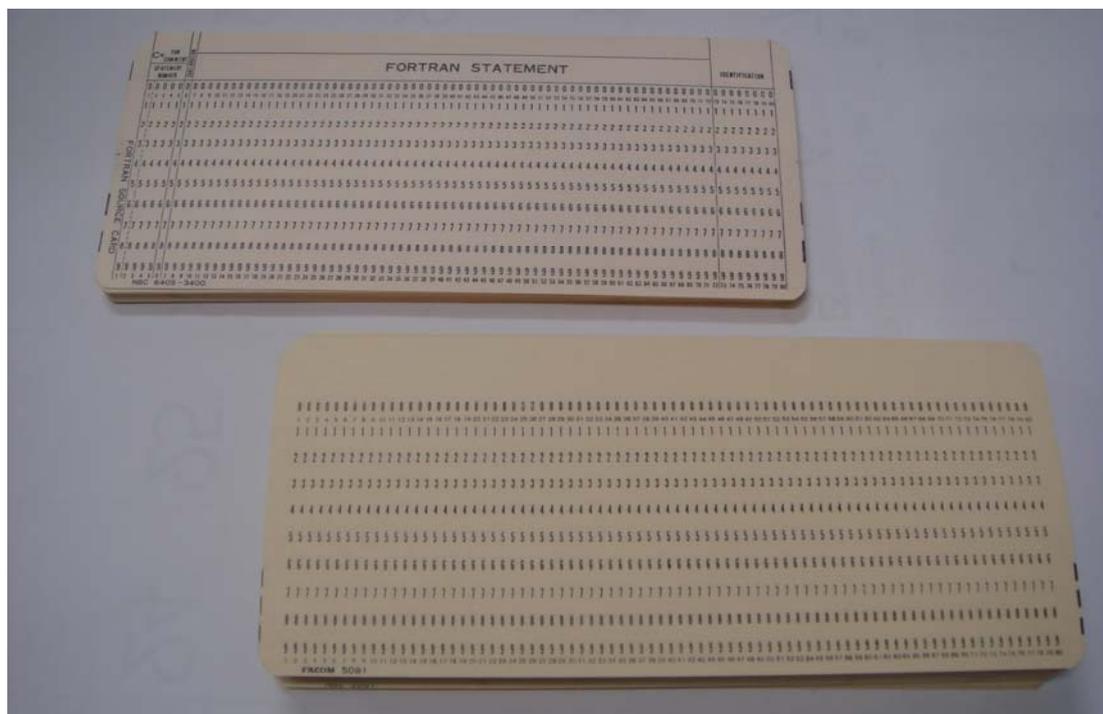


写真3 計算機の媒体 IBMカード